

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4392700086		
法人名	ティーティーシー有限会社		
事業所名	グループホーム あそ喜楽		
所在地	熊本県阿蘇郡高森町高森2133-8		
自己評価作成日	令和5年 10 月 1 日	評価結果市町村報告日	令和5年 12月 27日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

<p>新型コロナウイルスが5類に移行したが、まだまだ感染者が多く、色々と制限されています。利用者様もここ数年でレベル低下が著しく介護量も増えていますが、毎日を楽しみ安心して生活して頂けるよう援助しています。</p>

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://search.kaigo-kouhyou-kumamoto.jp/kaigosip/Top.do
----------	---

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

<p>地域に親しまれた事業所では、温かな雰囲気の中、穏やかな生活が送られています。入居者の高齢化や介護度の高まりで個別支援がより必要となっている状況が聞かれました。職員間では毎月の会議で意見を出し合える環境にあります。コロナ・インフルエンザと感染症の心配がある中、職員全体で対策に臨む姿が見られました。コロナ5類移行後も以前のような活動は難しい状況も窺えましたが、職員面談では家族との関わり支援についての課題も聞かれ、入居者のことを考え、家族のことを考える様子が見えました。</p>

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	NPO法人 九州評価機構
所在地	熊本市中央区神水2丁目5番22号
訪問調査日	令和5年11月12日

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、活き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	理念に基づいた年間目標を掲げ、日々のケアを実践している。また、入所者の方たちが充実した生活が送れるよう毎月モニタリングにて話し合っている。	理念に基づいた年間目標を掲げ、入居者の自分らしく穏やかな生活が継続するよう、ケアに取り組んでいる。	理念は日頃のケアの基本とされています。理念は介護計画の基本であり、介護計画は理念に通じるものであると考えます。理念について振返りの機会作りを期待します。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地域の催し物に参加したり、中高生の体験学習を受け入れや、近隣の店に買い物に行くなどしていたが、現在は中止している。	五穀豊穡を願う地域の祭りも3年ぶりに復活し、踊りの披露に来所頂いたことで入居者も楽しむことができた。入居者の希望により、少数ではあるが馴染みの床屋利用や買い物に出かける等、支援を継続している。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	運営推進会議が開催できず、地域の方々の意見を聞く機会が減少している。コロナの状況を共有するなどして、地域とのつながりを深めている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議を再開、新たなメンバー構成で、より良い活動ができるよう意見を聞きサービスの向上に努めている。	コロナの5類移行で対面での開催を再開したが、インフルエンザ等の流行により、開催については役場への相談を行っている。この数年で地区代表の交代もあり、今年久しぶりの対面開催で交流も深めることができた。	運営推進会議では事業所の取組みを伝えるとともに、意見・評価を受ける機会でもあると考えます。確認した資料では意見交換の結果が見えづらいものでした。意見交換があった際の際のみの議事録作成ではなく、過程等の記録も必要と考えます。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	町役場の担当課や社会福祉協議会との連携は良好、協力関係が出来ている。また、緊急時対応ネットワークのメンバーとして緊急対応品備蓄の協力を行っている。	運営推進会議への参加にて事業所の取組みを伝えている。従来より敷地内に発電機等を備えた町の防災倉庫があり、点検・管理は事業所で担っている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	施設が国道に面しているため、夜間のみ玄関を施錠している。また、毎月のモニタリングなどで身体拘束について話し合いをし、日々身体拘束をしないケアに取り組んでいる。	ホーム長・ケアマネージャー等で委員会を構成し、委員会の内容は後日職員間で共有している。職員研修を3ヶ月に1回行っており、身体拘束が心配される例がないか等、話し合っている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	全体研修会議を行っていないため、毎月のモニタリングで虐待について学ぶ機会を設けて、虐待防止に努めている。		

グループホーム あそ喜楽

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	成年後見制度を利用する方が増えた事で、職員が学ぶ機会を作り、理解し認識している。成年後見制度は活用できたが日常生活支援事業については認識も低いため、学ぶ機会を作っていくようにしたい。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約・解約については、運営者自ら説明を行い、利用者や家族に充分納得して頂いた上でやっている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	面会や電話などで、家族より意見や要望があればホーム長会議などで管理者や他職員に報告し、可能な限り反映できるよう努めている。	入居者の意見要望は日頃の職員との関わりから得ている。家族の意向は面会や電話による状況報告の際に確認するようにしている。内容は毎月の職員会議にて共有している。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月のモニタリングで、職員の意見や気づき等を発表する場を設けている。ホーム長や施設長などが話し合い検討した上で可能な限り反映できるよう努めている。	日頃から職員は管理者へ意見を表す機会を持っている。職員会議は全職員参加を基本に毎月開催しており、意見を出し合う場でもある。代表者からも職員へ声掛ける場もある。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	管理者や職員と個別に話す機会を設け、アドバイスやケアを行い不安の軽減・楽しみ、やりがいをもちながら働けるよう職場環境の整備に努めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	外部の研修会がないため、職員のレベルを把握し施設内で研修会を行う機会を設けて、職員のレベルアップを図っている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	感染症対策として情報を受け取りする中で、どうこの状況を乗り越えるか、など情報の共有に勤めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	安心して話せる環境と、信頼して話せるような関係性を築き少しずつ要望や困っている事、不安な事を聞きだしている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	定期的に、利用者の状態報告を行っており、職員を信頼して話せるような環境と雰囲気作りに取り組んでいる。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	充実した日々を送ってもらえるために、「何が必要なのか?」「何を求めているのか」本人と家族の必要としている支援を見極めサービスに取り組み支援できるよう努めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	日常生活を共に過ごし支えあいながら、信頼関係を築いている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	面会や電話にて本人の近況報告を行い、家族と協力しながら本人を支えていける関係を築いている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	地域の人々とのつながりを保てるよう努めてきたが、コロナ禍の中継続する事が難しくなっている。	感染症対策を継続し個別検討は継続しているが、買い物への外出や馴染みの理容室へ出向いたり、家族協力にて一時帰宅の支援を行っている。	コロナ5類移行後、他の感染症流行の懸念もありますが、入居者を共に支える立場として家族と入居者の関係が希薄にならないような取組みの工夫に期待します。
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	個々の性格や相性などを考え孤立しないよう工夫し、互いに関わりあうコミュニケーションが取れるよう支援している。		

グループホーム あそ喜楽

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	サービス終了後も施設外であった時には気軽に声掛けし相談しやすい関係を保つよう心掛けている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	利用者との触れ合いや会話の時間を多く持つよう努めている。本人の希望や意向を汲み取るようにしているが、困難な場合は説明し納得してもらった上で代替りの案を本人主体で考えられるよう支援している。	基本的に入居者の思いや意向に沿った生活を送ってもらっており、訪問時も職員が見守る中、自由に過ごす入居者の姿があった。思いを表すことが難しい入居者はこれまでの生活歴や日頃の様子、家族の面会時等での確認で把握している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	本人や家族から、これまでの生活歴や暮らし方、環境などを聞き取ると共に関係機関と連携を取り可能な限りの情報を集めるようにしている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	少しの変化も見逃さないよう一人ひとりの状態を把握し職員同士で情報を共有しながらケアを行っている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	毎月モニタリングを行い職員同士で意見を交換し本人や家族、必要な関係者と話し合った上で現状にあった介護計画を作成している。家族にも説明し了承を得ている。	毎日の入居者の様子がモニタリングチェック表を用いている。毎月の職員会議はモニタリングを兼ねており、入居者の日頃の様子を話し合い共有する場としている。介護計画の見直しは半年毎を基本としている。	毎月入居者の様子を職員間で話し共有する様子が聞かれました。家族の意見要望は面会等を機会にされているようですが、入居者を共に支える立場として担当者会議の開催を検討されてみてはいかがでしょうか。
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の様子や変わった事など介護記録に記入し毎月モニタリングで話し合っている。そこで情報を共有しケアを見直して実践に活かしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	医療機関や行政機関との連携を図ると共に、その時々生まれるニーズに対応。本人や家族のニーズの把握に努める事で可能な限り柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる。		

グループホーム あそ喜楽

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	新型コロナウイルスが5類に移行した現在も地域の方々と触れ合いが難しい状況であるが、戸外でのレクリエーションを見る機会が少しずつ出てきている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入所前からの主治医を重視し本人や家族の希望する医療機関を利用している。また、主治医による定期的な訪問診療もあるため利用者を継続してみられる環境を整えている。	入居前のかかりつけ医の継続した受診を支援している。主治医の定期診察は往診、眼科・歯科も訪問診療である。できるだけ薬を減らすことに取り組んでいる。通院が必要な際には職員が付き添い受診している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	介護職は医学的判断や処置が必要と思われる時は、必要な情報を看護職に伝え適切な処置や受診を受けられるよう努めている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院中は地域連携室とのやりとりを通じて利用者の状態を把握できている。退院時も、すぐに受け入れられるよう協力体制を整えている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	本人や家族の考えや意見、要望などを聞きながら主治医と情報を共有し連携をとりながら支援に取り組んでいる。	看取りは自然なこととし医師等とも協力しながら支援を行っている。最期の時には家族も居室で一緒に過ごし、医師の話も交え、家族の心のフォローも行い、最期のお別れをして頂いている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	毎月のモニタリングを通して、看護師による研修や指導のもと全職員が対応できるよう、実際の事例を用いたの検討も行っている。また、マニュアル作成し緊急時にも備えている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	全体研修会議時に火災や地震、火山噴火や水害での被害の予想をして避難場所の確認を行った。また、火災を想定した避難訓練を行い、防災設備と使用方法についても学んでいる。災害物資の貯蔵も行っている。	火災だけでなく事故・災害・感染症発生等、それぞれに対し確認を行っている。訓練の反省はホーム長会議等で行っている。今後は入居者・職員だけでなく、職員家族まで賄えるだけの食料備蓄等を検討しているところである。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	全職員が利用者の尊厳に配慮した言葉かけと対応を身につけられるよう努力している。また、職員間で注意しあっている。	介護度が高くなり、入浴や排泄での複数介助が必要な場面も見られるようになってきたため、特に配慮が必要となっている。入居者にとっての安心と信頼のため、丁寧な言葉掛けや対応を行っている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	利用者と話す際は、本人の思いや希望を引き出すような声掛けをし傾聴している。また、自ら伝える事ができない利用者に対しては表情や動作を見て汲み取るようにしている。その上で可能な限り自己決定できるように努めている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	一人ひとりのペースを把握した上でその人に合わせた声掛けを行う様にしている。それぞれのペースで希望に沿った一日を過ごせるよう支援している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	職員が声掛けや介助を行うことで常に身だしなみを整えていられるよう努めている。その人らしい身だしなみやおしゃれができるよう支援している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	一人ひとりの能力を考慮し、その人に合った作業(お盆・食器拭きなど)を行ってもらっている。食事中は会話をしながら楽しめるように支援している。	法人内で手作りの食事を提供しており、炊飯は各ユニットで行っている。毎月の誕生会や季節の行事食も楽しみとなっている。以前のように一緒に調理できる入居者も減ったが、中には干し柿作り等を手伝う姿も見られた。準備・片づけ等には積極的な手伝い・関わりは難しい状況となった。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	毎日の摂取量を介護記録に記入し食事量や水分量の把握に努めている。利用者の嚥下能力や嗜好、疾患などを考え今の状態に合った食事を提供している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	一人ひとりの能力に応じて声掛け、見守り、介助を行っている。また、歯科医師と連携を取り必要な方には指示に従った口腔ケアを行っている。		

グループホーム あそ喜楽

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	一人ひとりの排泄間隔を把握し時間誘導を行っている。また、体調やしぐさを観察してできるだけ失敗がないよう努めている。夜間も排泄間隔に合わせた誘導や声掛けにてトイレでの排泄ができるよう支援している。	入居時の状況を基本として対応をはじめ、入居後の様子をモニタリングで検討しながらパットやオムツの選択を行っており、家族負担にも配慮している。日中はパットの利用も多い。立位が難しい入居者も複数介助でできるだけトイレでの排泄に向けた支援を行っている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	一人ひとりの排泄パターンを把握し下剤の調整や牛乳の提供、ホットパックや腹部マッサージなどで排便を促すようにしている。便秘が酷い時は運動を促し、水分強化するなど個々に応じた予防に取り組んでいる。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	週2～3回、体調や気分などを考慮して入浴するか決めてもらっている。時間も本人の希望を聞き、可能な限り合わせるようにしている。	週2～3回の入浴を基本に支援を行っており、平日の入浴が難しかった入居者には日曜日も対応する。機械浴(寝湯)が備えられていることから、介護度の高くなった隣接事業所の入居者を受入れる場合もある。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	いつでも本人が希望する時は居室で休息してもらっている。夜間、定時の巡視時、不安や話がある時など談話・傾聴し安心して眠れるよう支援している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	介護記録に薬事情報をファイルし、いつでも確認できるようにしている。また、処方薬に変更があった場合は口頭、申し送りノートなどに記録し全職員が把握できるようにしている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	茶わん拭きや洗濯物たたみ、飾り物作りや脳トレなど、その人が喜びを感じたり、役割意識を持てるようにしている。また、飲み物やあめなど好きな物を食べる等する事で気分転換を図り生きがいのある毎日を遅れるよう支援している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるよう支援している	コロナ禍で家族との外出も未だに出来ず、気温上昇により、散歩する機会も減り、季節の花を飾って季節を感じてもらえるよう努めている。また、少人数でドライブして自宅を見たりする等の活動をしている。	以前は花見等のドライブにも出かけていたが、近年のコロナ禍で気軽な外出が難しい状況が続いていた。現在は希望される方の散歩程度となっている。車椅子利用者も増え、一度に外出できる環境作りも難しくなったのが現状である。	

グループホーム あそ喜楽

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	手持ち金の上限を決め、その範囲内で利用者には現金を所持してもらっている。買い物に行きたいと希望があれば職員同行で買い物を楽しんでもらっている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	利用者よりきぼうがあればいつでも電話できるように支援している。また、手紙や年賀状の作成を職員が介助したり投函を代行し、家族や友人と連絡が取れるように努めている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間（玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等）が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激（音、光、色、広さ、温度など）がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	室内は明るく落ち着いた雰囲気、月ごとに折り紙や切り紙などで季節感が感じられる装飾を行っている。また、利用者と職員と一緒に洗濯物たたみや食器拭きなどを行い、生活感を感じてもらっている。職員は、温度・湿度に気を配り過ごしやすい空間作りに努めている。	各ユニットそれぞれの特徴が見られる。散歩に出た際に摘んだススキを飾ったり、季節の果物の飾り等での工夫が見られる。床暖房の利用により温かな温度の中、穏やかな雰囲気を持つ空間となっている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	利用者同士でホールにてテレビ鑑賞や談話を楽しまれたり、ゆったり過ごせるように廊下やホールの一角に腰掛やソファを配置し、自由に思い思いの時間を過ごせるように努めている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室では本人が使い慣れた物を置いたり、使いやすい様な家具などの配置を行い、安心できる居心地の良い空間作りに努めている。	居室にはテレビや冷蔵庫・生活用品が持ち込まれている。居室で過ごすことが好きな入居者もおられ、心地よい空間となっている。夫婦での入居に対応できる部屋もある。歩行が難しくなった入居者は目が届きやすい居室への移動もある。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	室内はバリアフリーになっており、手すりも各所に設置され、車椅子や歩行器利用の利用者でも安全に移動できるよう配慮されている。また、日時が分かるようカレンダーや時計を配置し自立した生活ができるような環境作りを行っている。		

2 目 標 達 成 計 画

事業所名 グループホーム あそ喜楽

作成日 令和5年 12月 25日

【目標達成計画】

優先順位	項目番号	現状における問題点、課題	目 標	目標達成に向けた具体的な取り組み内容	目標達成に要する期間
1	20	家族と入居者の関係が希薄にならない取り組みの工夫が必要	面会の機会が少ないご家族へ、入居者の様子を伝える連絡を小まめにする	最低一ヶ月に一回の家族への連絡(入居者の生活の様子中心。要望あれば写真等を送付)	1ヶ月
2	4	運営推進会議での意見交換の過程を含めたうえでの記録	事業所の取り組みを伝えるだけでなく意見交換も積極的に行うことで、サービス向上に活かす	運営推進会議実施毎に議事録を作成する	6ヶ月
3	1	理念についての振り返りの機会作り	理念についての振り返りの機会を作ることでケアの質の向上に繋げる	事業所毎での月一回のモニタリングで理念について振り返りを行う	1ヶ月
4					
5					

注1) 項目番号欄には、自己評価項目の番号を記入すること。

注2) 項目数が足りない場合は、行を追加すること。